

令和七年度

中学校B日程入学試験問題

国語

受験上の注意

- ◎時間 …… 五十分
- ◎解答はすべて解答用紙に記入すること。
- ◎字数制限のある場合、句読点、カギカッコなどの記号も字数に入れるものとする。
- ◎解答は、枠内に濃くはつきりと書くこと。

第一問題 放送問題

- ① 本文を読んだあとで、問いを読みます。どちらも一回しか読みませんから、しっかり聞いてください。
- ② 問いは全部で五問あります。
- ③ 左の空らんを使って、メモをとってもかまいません。



第二問題 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「ぼくはもう、母さんに、^①今までほど世話を^ほして欲しくない」

口に出して言ってみて、それが本当だとわかった。

「おまえは何を言っているのかわかっているのか。お母さんに謝れ^{あやま}」
父親がぼくをにらんだ。

確かにぼくは、母親に謝らなければいけないことを言った。そう思う反面、言いたいことがやつと言えたとホツとした。それとぼくは、にらまれるほどのことを言ったようには思えない。ぼくは答えた。

「でも、母さんはぼくをかまひ過ぎる。いつもいつでも、タツちゃん、タツちゃんって、ぼくのことばかり気に掛^かけてる。勝手にぼくの部屋に入って掃除^{そうじ}やかたづけをするとか、ちよつと熱が出ただけで大げさに騒^{さわ}ぐとかね。それを今まで受け入れてきたぼくも悪かったと思うけど、もう中学生なんだから、母さんはぼくのことばかりをかまうより、もつと自分のしたいことをしたらいと思う」

すらすらと言葉が出てきた。母親はぼくを見つめてから、父親に顔を向けた。まるで自分では答えたくないようだった。

「お母さんがしたいのはおまえをかまうことと、世話をすることだ、タツキ。せつかくやってくれているのに、何を嫌^{いや}がる。喜んでお母さんに任せておけばいい。何度言わせる」

母親が笑顔でうなずいた。^②ぼくにはその笑顔が、ちよつと怖^{こわ}かった。

母親はぼくといるときはぼくの味方をして、父親がいると父親の味方をするのだなと改めて思った。それが母親のやり方というか、生き方なんだ。

ぼくの頭の中はフルスピードで動いていた。「わたしが人付き合いの苦手な人間で、お父さんはわたしに家において欲しいって言うし、お互い^{たが}の意見が一致^{いっち}したのよ」「ユキに任せているといつてもいいかもしれない」「お母さんがしたいのはおまえをかまうことと、世話をすることだ」「喜んでお母さんに任せておけばいい」

ぼくの思いは、何も受け入れてもらっていない。父親と母親が決めた役割^{やくわり}分担^{ぶんたん}があつて、生まれてきたぼくは、母親が生きがいになっている子育ての対象で、それに従^{したが}って言われているだけだ。

もちろん、生まれたときは仕方がなかった。でも中学生になった今でも、同じように考えなければいけないのだろうか。両親が「役割分担」をしているのは別にかまわないけれど、それをぼくにも押しつけようとしているように思えるのは、なぜだろう。

ぼくの心がひねくれているのだろうか。被害妄想なんだろうか。

ぼくは、父親に向かって言おうとした言葉を、いや、母親に向けて言わなければならないと思って、勇気を振り絞って母親を見て言った。

「ぼくは、母さんの生きがいのためだけに生きているわけじゃない」

「なんてことを言うんだ！」

父親がテーブルをこぶしで叩き、湯飲みが倒れた。

あわてて、父親は注1タブレットをテーブルから持ち上げた。母親が立ち上がって、こぼれたお茶を布巾で拭いた。けれどそれでは足りないのでぼくはキッチンルームに走って、キッチンペーパーを何枚か大急ぎで持ってきた。

それを受け取った③母親の目に涙があった。

ぼくはうろたえた。

「お母さんを泣かせて楽しいか。それがおまえの自立ってやつか、タツキ」

父親は、ぼくをにらむというより、④あざ笑うような表情をした。この人は何が楽しいのだろうか。

「そんなはずはないでしょ」

ぼくは、もうこんな状態から逃げ出したくなった。母親に「行ってらっしゃい。タツちゃん」と言われて背中せなかに触れられ、弁当べんたんも洗濯せんたくもみんな任せて、元のように暮らしたくなった。

そう思った途端とたん、嫌いやだという気持ちこころもちがそれを押しつぶした。

「だったら、さっき言ったことは間違いまちがだったと、お母さんに謝れ」

できない。だって、「ぼくは、母さんの生きがいのためだけに生きているわけじゃない」のは本当だから。ぼくは嘘うそをつくことがあるけど、今はできない。

どう答えればいいのか。

「ぼくは、母さんの生きがいのためでなく、⑤ぼくのために生きたい」

思いつくのは、それが精一杯せいいつぱいだった。精一杯なのに、母親に向けて言えないで、父親に向けても言えないで、ぼくは、下を向いて言った。

ぼくは弱虫だ。

「何だ、それ」

父親が鼻を鳴らした。

「だから、」ぼくは今度はがんばって、母親の顔を見た。涙はもうなかったけれど、無表情になっていた。「だから、やりたいことをやる。弁当を作るのが、洗濯をするのが、母さんの仕事だと、父さんが考えていたとしても、やる。それが母さんの領分で、それを奪うばうなど父さんが怒おこっても、母さんが望んでも、ぼくはそれをしたくなってきたからやる」

洗濯はまだ好きかどうかわからなかったけれど。

父親は母親が新しく入れたお茶を飲んでから言った。

「そうか。ごりっぱになったものだな。だがな、おまえにはまだ保護者が必要なんだよ。一人で食べてもいけない。学校だって通わなくてはいけない。だから、な、タツキ。おまえは、ただの子どもだから、親の言いつけに従したがいなさい」

父親がぼくをにらんだ。

ぼくは力を振り絞しぼって言った。

「子どもだからって何でも、父さんや母さんのいいなりになる必要はないでしょ」

「ああ。ないな。わたしが言っているのは、お母さんの気持ちを考えてやれということだけだ。簡単かんたんな要求だろ」

父親がまた笑った。母親が背中に触ふれるときのようにぼくはゾクツとした。

「母さんの気持ちは考えるよ」

ぼくは母親を見てうなずいたけれど、母親の気持ちをわかっているか自信はなかった。わかっているのに考えることなんてできるのだろうか。

ぼくは続けた。

「でも、弁当作りと洗濯はやめないよ」

父親の笑顔がどこかへ消えた。ぼくはホツとした。

「どうして、そこにこだわる。任せておけばやってくれるのに」

父親がまた、ばかにしたようにぼくを見た。

勝手に言葉が出た。

「母さんは、任せておけば勝手にやってくれるからだよ、父さん」

ぼくは母親を見た。母親は、ぼくから目をそらした。ぼくが、鏡に映っている自分から目をそらすように。

「本当に、まったく。おまえは何が言いたいのだ」

父親はぼくをじっと見つめた。

「ぼくが言いたかったのは、家の中では何もせず母さん任せにしている人間にはなりたくないってことだよ」

その後に続く言葉をぼくは呑み込んだ。

ぼくを愛して、ぼくをかまう母親が重たいのだ。母親には、ぼく以外の他の何かにも関心を抱いて欲しいのだ。もうぼくのことをそんなにかまわないで欲しいのだ。

「なんだか、わたしを批判しているように聞こえるな」

そうだろうか？ そうかもしれない。でも、二人は、自分たちで「役割分担」でいくと決めたのだから、本当に母親が納得しているのかはわからないまままだけど、決めたのだからそれでいい。勝手にすればいい。けれど、ぼくはそれに参加しない。

「そんなことはないよ。父さんたちには父さんたちの生き方がある」

「わかった。じゃあ弁当作りと洗濯をしている間は、小遣いは止める」

思わず息が止まりそうになった。そこまでやるか？ 注マシロが言っていたことが現実になった。でも、それでやめるわけにはいかない。

「わたしが、やるなど言っていることを、おまえはするのだから、そのための資金をわたしはAタつわけだ。いい考えだろ」

父親がにやりと笑った。

「お父さん、それはかわいいそうでしょ」

父親とぼくを交互に見ながら母親が言った。

「これくらいしないと、タツキはわからないんだよ。何もB永遠に小遣いをタつというわけでもないのだから。ユキも賛成して

くれるだろ」

父親は、本当にうれしそうに笑った。

その顔を見てぼくは、なんだかおかしくなった。

まるで父親が、ただの意地の悪い子どもに見えたのだ。

そう思うぼくも、意地の悪い子どもだけだ。

「まあ、しばらくなら、タツちゃんも考え直してくれるかもしれないわね、お父さん」

母親が父親に賛成した。正直、そこまで賛成するとは思わなかった。でも、小遣いを止めることで、弁当を作らなくなったら母親はうれしいのかもしれない。

「どうする、タツキ」

「それでいいよ」

⑥ 考える前にそう返事をしていた。そこま^{おどろ}でぼくが弁当作りや洗濯にこだわっているなんて、自分でも驚いた。だけど、言ってみて、それでもいいと思った。

(ひこ・田中『あした、弁当をつくる。』より)

注1 タブレット …… 板状の情報機器。

注2 マシロ …… タツキの友人。

問一——線A・Bについて、次の問いに答えなさい。

(1)——線A「タツ」の漢字として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、立つ

イ、絶つ

ウ、経つ

エ、建つ

(2)——線B「永遠」の読みをひらがなで答えなさい。

問二——線①「今まで」とありますが、今まで母親は「ぼく」にどのように接していましたか。具体例を本文中から二十二字と十七字で抜き出し、それぞれ初めの三字を答えなさい。

問三——線②「ぼくにはその笑顔が、ちよつと怖かった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、自分が言いたくないことを父親に言わせる母親はひきょうだと思ったから。

イ、父親の言うことがすべて正しいと信じている母親が不気味だと思ったから。

ウ、「ぼく」にも父親にもいい顔をしようとする母親が理解できないと思ったから。

エ、笑うばかりで真剣に取り合ってくれない母親のことを信用できないと思ったから。

問四——線③「母親の目に涙があった」とありますが、母親が涙をうかべているのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、いつもは落ち着いている父親が大きな声を出して怒っている様子がおそろしかったから。

イ、子どもだと思っていた「ぼく」が自分の意見をはっきりと主張する姿に感動したから。

ウ、これまでの「ぼく」への関わり方を否定するような「ぼく」の言葉に傷ついたから。

エ、自分の行動や発言のせいで「ぼく」と父親が言い争っていることに責任を感じたから。

問五 ——線④「あざ笑う」はここではどのような意味で使われていますか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、周囲を気にせず大きな声で笑う。

イ、うまくいっただことに満足して笑う。

ウ、苦々しく思いながら仕方なく笑う。

エ、相手を見下しばかりにするように笑う。

問六 ——線⑤「ぼくのために生きたい」とありますが、このことを両親に理解させるために「ぼく」はどのような行動をしていますか。本文中の言葉を用いて十五字以内で具体的に答えなさい。

問七 ——線⑥「考える前にそう返事をしていた」とありますが、「ぼく」がこのような行動を取ったのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、父親の言うことにすべて反発した結果、後に引けなくなってしまうから。

イ、両親に何を言われても、自立した生活を送りたいという気持ちが強かったから。

ウ、これ以上両親と話し合ってもむだだと感じ、早く会話を終わらせたかったから。

エ、父親が止めたとしても、母親がこっそり小遣いを渡してくれるはずだと思ったから。

問八 本文の内容と合っているものには○、合っていないものには×を書きなさい。

1、「ぼく」は自分の考えが本当に正しいのだろうかと疑いながら父親と話をしている。

2、「ぼく」は自分を押しさえつけようとする父親に対し、常に筋道の通った反論をしている。

3、「ぼく」の視点で物語が進むので、父親と母親が心の中で本当に思っていることは分からない。

4、父親は「ぼく」が立派に成長したことを認めているが、母親の気持ちを考えるように求めている。

第三問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人の気持ちを類推し、過去への後悔と将来への不安をぐるぐると考えてしまうのは、脳が本質的に持っている妙な性質のせいだということがわかった。

それが生まれ持ったものだとしたら、今から変えることは難しい。また、人の心を変えようなんて考えてもいけない。だとしたら、それを逆に利用して見てはどうだろうか。

この章では、その①妙なクセを最大限活かして、傷ついた心を癒し、未来に向けて前向きな行動ができるための治療法や工夫について紹介したいと思う。

(中略)

昨今、「自己肯定感^A」という言葉が溢れている。「自己肯定感を高める食事」とか「自己肯定感を高めるファッショ^Bン」などを見聞きしたこともある。しかし、ここで問題なのは、自己肯定感が高いことが本当にいいことなんだろうかということだ。そもそも自己肯定感が高める、低めるといふ類のものなのだろうか。

自己肯定感というと、一般的なイメージとしては「私はできるぞ、すごい業績を上げているぞ、何でもできる万能だ」という気持ちのことだと思われる。自分が思ったとおりにことがうまく運べば肯定感が増し、優越感を得ることになる。できなければ劣等感につながる。

これは結局、自分と他人を比べることで得られる感覚なのだ。基準となっっている他人よりも自分が上になれば自己肯定感が増す。あるいは、過去の自分よりもより良い自分になることや、より高みを目指さなければならぬといったことが注1強迫観念のように求められている。もちろん注2ネガティブよりはいいけど、常に向上していかなければならないのは少しプレッシャーではないだろうか。注3第5章でも述べた通り、キラキラした人たちが毎日のように成功体験を報告してくるのを見て、自分も向上しなきゃと思うのは疲れちゃうよね。

疲れてしまう原因は、これまで述べてきた通り、結局、「過去への後悔」と、「将来への過度の期待」によって成り立っている

からだろう。「今ここにある自分」は、結局置き去りにされている。本来の自己肯定感の定義は「ありのままの自分を受け入れよう、それを認めよう」ということだったと記憶している。いつからこのようにB**拡大解釈**されるようになったのかは不明だ。劣等感を抱えている自分、挑戦したけど失敗した自分、それも含めてまず自分を受け入れよう認めようということだ。なので、そもそも自己肯定感が高めるとか低めるといった類の感覚ではないのだと思う。

それよりも、僕が大事にしているのは、「自己効力感」という感覚だ。これは、自分が何かをしたということがしつかりと周りに影響を及ぼしているという実感のことだ。もちろん、自分の提案したアイデアが採用された、賞をとったというのも大事だけど、ずっとやろうと思っていたお皿洗いをやったとか、「ToDo」リスト（しなければならぬことリスト）が1つ減ったとかでも目に見える効力感だと思う。そしてそれはなにも他人に肯定される必要はない。

これは、子育てや教育においても重要な視点ではないだろうか。たとえば、いろいろなことを自分自身でやってしまった方が絶対早く済む。**②**、それをあえて子どもや後輩にやってみよう。その結果の良し悪しは問わない。やってくれたことに対して感謝を伝える。とても当たり前のことのように思えるけど、実践するのは難しいかもしれない。人の心や行動をどうにかしようと思うのは大変なことだけど、少なくとも自分の力で制御できるはずのことが、ちゃんと自分の意図した通りになるという実感を積み重ねていくのは、精神衛生上も重要なことだと思う。

人間関係を円滑に進める秘訣は、**③**相手の自己効力感を満たすことなのかもしれない。自己肯定感を軸にすると、自分は優越感を感じる代わりに、他の人は劣等感を感じてしまうことは避けられない。それが「気に入らない」とかいった反発やいじめとかにつながるってくる。「自分はこれができる、だから自分すごい」という自己肯定で終わらずに、「それはいつも支えてくれていたあなたのおかげですよ」みたいな感じで感謝を伝えることで、相手の自己効力感も同時に満たせるように心がければ、円滑に人間関係を進められるのではないだろうか。

単に報酬系を満たすためにご褒美をあげるだけではなく、世の中に認められているという承認欲求も満たしつつ、ちゃんと人に影響を及ぼしているという実感も与える——この3点セットが心の健康に必要なのだと思う。コツは、細かい成功体験を積み重ねるといふこと。**④**今日からできる方法としては、スマホの「ToDo」リストにやりたいことを全部書き出して、できたらそれにチ

エックをつけて消していくこと。紙に書き出してマジックで線を引いて消すのもいいと思う。自分はやんと影響を与えてい
るぞという実感を、ちよつとずつ得ることが重要だ。

(毛内 拡『「氣の持ちよう」の脳科学』より)

注1 強迫観念 …頭から離れない考えのことで、その内容は筋が通らないとわかっているけれども、頭から追い払うことができな
いこと。

注2 ネガティブ …ここでは、否定的、消極的な様子のこと。

注3 第5章 …「人から認められたい」「社会とつながりたい」「自分を実現したい」というのは人間らしい欲求であるこ
と、それが叶わなかった場合に心を守る心のはたらきも備わっていること、という内容が書かれている。

問一 ――線A「感」の赤い部分は何画目になりますか。漢数字で答えなさい。

感

問二 ――線B「拡大」の反対の意味の言葉を漢字で答えなさい。

問三 ――線①「妙なクセ」について、後の問いに答えなさい。

(1) どのようなクセのことですか。解答欄に合うように本文中から三十五字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(2) 筆者は「妙なクセ」を何のために利用していくと言っていますか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、自分の気持ちや人の心を変えようとするため。

イ、これから前向きな行動ができるようになるため。

ウ、こわい思いをしすぎずついた心を落ち着かせるため。

エ、今までの後悔と不安を心から完全に取りのぞくため。

問四 本文中の②に当てはまる最も適当な語を、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、だから

イ、つまり

ウ、けれど

エ、ところで

問五 ――線③「相手の自己効力感を満たすこと」とありますが、筆者は「相手の自己効力感を満たす」にはどのようなことをすればよいと考えていますか。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 ――線④「今日からできる方法」とありますが、この方法を実行することでどのようなことが期待できますか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

問七 次の会話文を読んで後の問いに答えなさい。

崇さん 「『自己肯定感』は一般的なイメージと、本来の定義で意味がちがうみたいだね」

仁さん 「一般的なイメージとしては [A] のことだよね」

徳さん 「そうだね。『漢字テストをして、クラスで一番の点数だった』のような例だと前向きになるよね」

珠さん 「あとは、 [B] というのもそうだよね」

崇さん 「じゃあ、『自己効力感』を満たす例としてはどんなことがあるかな？」

珠さん 「『自己効力感』を満たすには、自分でコントロールできるはずのことが、ちゃんと自分の思い通りになるといふ実感を積み重ねることが大切なんだよね」

徳さん 「 [C] というのはどう？」

仁さん 「なるほど。いい例だね」

(1) 会話文の中の [A] に当てはまる表現を本文中から十八字で抜き出して答えなさい。

(2) 会話文の中の [B] ・ [C] に当てはまる最も適当な例を、次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、パン屋さんに行ったが、クリームパンが売り切れていた。

イ、遠足に行った時の絵を描いて、コンクールで入賞した。

ウ、地球は自転しながら、太陽の周りを約一年で一周した。

エ、初めてクッキーを焼いてみたが、こがしてしまった。

オ、早起きをして、毎日続けてラジオ体操に行くことができた。

第四問題

「ハンガー」を見たことがない人に、それがどんなものか、なるべく多くの角度から説明してください。

著作権の関係により、
中学校B日程入学試験「国語 第1問題」の放送原稿は添付しておりません。

